

(望岳山荘にて行人天橋)市民タイムス-1990.09.09

望岳山荘 にて

この夏休みの後半

は、海外への出張が相次いだ。私自身一年間生活したことのあるオーストラリアで十二日間を過ごしたあと、いったん帰国して、その日のうちに香港へ向かうというハードなスケジュールであったが、香港もかつて二年近く暮らしたところであるうえに、私にとってもっとも数多く出かける地域なので、外国へ来たという感じにはあまりならない。しかし、その私でも、香港の変

化の早さには驚かさず、林立する高層ビル群の偉容には、いままらながらに圧倒される。

こつて外観を見ればかぎり、この地が一九九七年六月末を期して中国に返還されるとい

「行人天橋」

う「一九九七年問題」などまったく関知せぬかのようであるが、ひとたび外皮をよりのぞいてみると、香港中国化の影が重くこの地を蔽っている。

今回の香港滞在は、新しく公立の大学に昇

格した香港バプチスト・カレッジ主催の「岐路に立つ中国と香港」という国際会議に招かれたからであったが、ここでの討論にもそのような重い影が沈んでいた。

いかにも香港中国人が考えつきそうな造語であるが、なるほど、あの無味乾燥な歩道橋を「行人天橋」とはよく言ったもので、夢があつていいではないか。問題は、この歩道橋を香港の人びとがほとんど渡らずに、信号が赤でも平気で道路を横ぎることである。香港政庁は、だから赤と青の信号の間隔をやむなく短くしたのだという。

て宿舍へ戻るとき、遠く香港島ウイクトリア・ピークのシルエットを眺めながら、例の二階建のバスに乗っていると、目線にすべ近い歩道橋(Foot Bridge)の(C)MTC「行人天橋」と書いてある。

それにしても、わが郷土・松本市内の信号の間隔はあまりにも長すぎるのではなからうか。

(中嶋 嶺雄・東京外語大教授)